

－「総合人間科」設置の試み－

2. 研究開発に取り組むまでの経緯

(1) 完全中・高一貫教育をめざした学校改革

学部・附属の合意 (昭和63年10月)

「多様な生徒による学級編成」

「受験という動機づけのみに依存するのではなく本来の学習とはなにか、なんのための学習かを常に考えさせることにより基礎学力を身に付けさせ、かつ、それぞれの生き方を掴ませようとする」

「国民のための中・高一貫教育をめざすユニークな教育過程の開発と実践」

平成元年度入試より、希望者の附属高校全入をうたう

(2) 校内研究体制

① 自主的研究グループ時代 (昭和63年まで)

授業研究、生徒指導、コンピュータ、総合学習、進路研究、教育過程など中等教育研究協議会 教科と教科外 (研究グループによる) とを交互に総合学習研究グループ

高2 研究旅行 (広島) での平和学習

昭和55年～

中3 における総合学習「人間について考える」

昭和56、57年

高3 文系選択科目総合学習「生命について」

昭和61～平成7年

② 学校改革のための分科会時代

(平成元年～6年)

全教員による学校改革への取り組み

教育課程分科会、生徒指導分科会、平和教育分科会、国際理解分科会、学行事分科会のいずれかに所属して実践と研究を推進

3. 研究開発の実践・研究体制の特色

(1) 学部・大学・保護者とのつながり

運営指導委員会、研究協力者、スクールボランティア

(2) 実践・研究の単位としての学年担任団

担任団による年間指導計画づくり、教材研究、フィールドワーク実施

小グループ (分科会) 指導

(3) 教育活動の総合化

教科・教科外 (道徳、学校行事、学級活動、生徒会活動) の総合化、その結節点としての総合人間科

(4) 「総合人間科」の学習課題

現代的・人間的課題 生命・環境・平和・

人権・性・国際理解・核・・・

学年テーマ 生き方 (中1・高3)、生命と環境 (中2・高1)、平和を学ぶ (中3・高2)

(5) 「総合人間科」の3つの「脱」

脱教科 教師のTT、スクールボランティア

脱教室 フィールドスタディ、大学の研究室訪問

脱偏差値 教科とは異なる評価の観点

(6) 学校づくりとしての総合的学習 総合人間科の実践から見えてきたもの

生徒の学ぶ目的・意欲と「総合人間科」

教師の在り方を問う「総合人間科」

“教科の専門家”意識の揺さぶり、教師のチームワーク

“指導教官”から“オブザーバー”へ (高2)

地域社会の一員としての学校の在り方

4. 本日の公開発表会の視点

(1) 公開授業

3つの「脱」の意味

フィールドワークとの関わり

生徒たちの表現能力・コミュニケーション能力

教師の関わり方

(2) シンポジウム

総合的学習のさまざまな可能性

総合的学習の内在する問題点

[Ⅲ] 講演

総合的学習の全国的動向について

関西大学教授 総合情報学部長

大阪大学名誉教授 水越敏行

1. 揃える教育と違える教育

(1) 必修・選択・総合などカリキュラムの多様化。

(2) 教師の指導性と児童生徒の自律性との相互作用も多様化。

(3) 大学における講義・演習・実習・卒業研究をモデルに。

2. 選択学習～総合的学習について

(1) 環境教育、国際理解 (異文化理解) 教育、人間研究、地域研究、福祉教育などの今日の課題をカリキュラムの柱の一つに。

(2) 日本の中学校での事例

*滋賀大学附属中学校 「BIWAKO TIME」 (異学年

たて割の班構成)

* 島根大学附属中学校 「宍道湖」「子どもが遊べる
松江の都市環境」

* 香川大学坂出附属中学校「瀬戸大橋」「日本語の中
の世界・世界の中の日本語」

いずれも外部の専門家が指導、教師は時にはコ
ーディネーターに。

* 信州大学附属長野中学校「世界への扉を開く」

国際支援などのホームページを開いたり、共通
テーマでのメール交換。

(3) ドイツでの「統合」Konzentration

* 内容の横の関連 (接続教材をもとにして、同時期
に各教科をつなぐ。)

* レベル分けをして高さの集中 (同じテーマを学年
や達成度で段階的に)

* 各教科にわたるテーマの集中 (確率と決定論を数
学、歴史、哲学、物理、生物など)

* 典型的な生活問題における実在的集中 (統一ヨー
ロッパ、平和の保障、など)

このような統合の事例が7つあげられている。
高橋英児 (広島大学大学院のHans Clocckel の紹介
に拠る)。

3、教育方法改善には、システムの見直しを。

(1) 教授組織

多様な協力教授システム。学外の専門家も含む。

(2) 施設設備

校内のオープンスペース、専用教室、特別教室な
どの多目的活用。

校外の公共施設、インターネットによる架空の施
設利用。

(3) 学習集団

課題別小集団学習、異学年縦割り集団、テレビ会
議や電子メールによる他地域の学友。

(4) 学習時間

年間総時数を決めて、1単位時間の弾力的運用。
モジュールシステム (坂出)、特定曜日の午後の弾力
的運用 (滋賀)、合科選択 (広島県の選択研究指定校)
など。

これらの新しいシステムと従来のものとをどのよ
うに組み合わせるか。現場の英知をぜひとも結集し
てほしい。

参考文献

1、水越敏行「メディアが開く新しい教育」

(学習研究社、1994)

2、水越・佐伯編「変わるメディアと教育のありか

た」 (ミネルヴァ、1996)

3、熱海・奥田編「教育課程の編成」

(ぎょうせい、1994)

4、水越・奥田編「個性を生かす教育」

(ぎょうせい、1994)

5、滋賀大学附属中学校「生きる力を育てる総合学
習の実践」 (明治図書、1997)

〔Ⅳ〕シンポジウム

〔新教科 総合人間科の成果と展望〕

パネリスト

水越敏行教授 (関西大学)

鹿嶋研之助調査官 (文部省)

的場正美教授 (名古屋大学教育学部)

丸山豊教諭

(名古屋大学教育学部附属中学・高等学校)

指定討論者

山田正敏名誉教授 (愛知県立大学)

四方義啓教授 (名古屋大学大学院)

司会

安彦忠彦教授

(名古屋大学教育学部附属中学・高等学校長)

榎本直子教諭

(名古屋大学教育学部附属中学・高等学校)

安彦 校長が司会をして、シンポジウムをやるとい
うのはあまり例がないじゃないかと思いますが、現
在、本校の研究を先生方と色々な意見の違いを基
にしながら、基本的には、本校の先生方の主体性を
尊重して、こういう形でやって参りました。必ずし
も私は、本校のやってることに全面的に賛成でもな
いという、片方の肩を出しているという、いつもの
私のスタイルなんです、そういうことで司会をする
ことがいいかなと思って、引き受けさせていただきました。
今、水越先生のお話がありましたように、
連絡不十分で講演の方で、はしょっていただきました
ので、シンポジウムの方でも、少し時間を割いて
お話しいただこうと思っております。それでは、引
き続きでたいへん恐縮でございますが、テーマ的に
は、今、全国的な動向を、あるいは、ドイツのこ
とも入りましたから、世界的な動向もふまえて、この
総合的学習について、4時まで途中休憩を入れるつ
もりでおりますが、先生方と一緒に検討を深めたい
と思っております。では最初に私の方から、それぞれの提
案者の方のご紹介を申し上げて、討論の視点と言いま
すか、視野を午前中、田中先生の方から話があり
ましたけれども、少し明確にしておきたいと思いま